

Market Flash

発表日: 2020年2月28日(金)

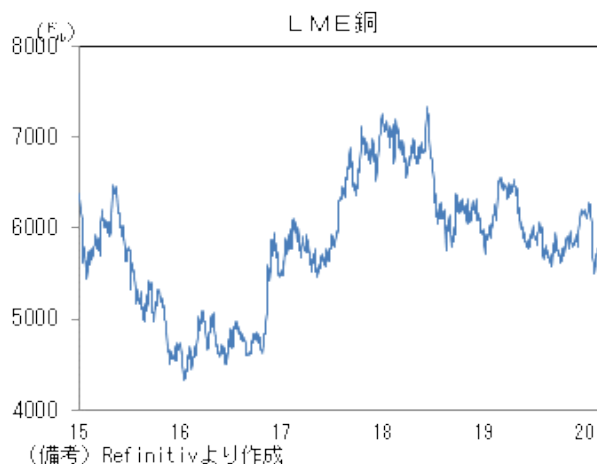
- ・銅の言う通りだった
- ・米国株の過熱感解消へ

第一生命経済研究所 調査研究本部 経済調査
主任エコノミスト 藤代 宏一 (TEL: 03-5221-4523)

- ・日経平均は底堅い企業業績を背景に、先行き12ヶ月は24000近傍で推移しよう。
- ・USD/JPYは日米金融政策が様子見となる下、先行き12ヶ月は105程度で推移しよう。
- ・日銀は現在のYCCを長期にわたって維持するだろう。
- ・FEDは予防的利下げに続き、更なる利下げを検討するだろう。

< #米国株 #銅価格 #過熱感解消へ >

- ・27日の海外市場は新型肺炎への懸念からリスクオフ継続。引けにかけてはカリフォルニア州の感染拡大懸念が伝わり売りが加速。セリングクライマックス的な様相を呈した。この日のS&P500は▲4.4%の下落、週初からの累積下落率は10%超。VIXは39.16へとスパイク。金(1642.50ドル、▲0.6ドル)とWTI原油はともに続落(47.09ドル、▲1.64ドル)。
- ・ところで、炭鉱のカナリアとも称される「銅」は今回も鋭い嗅覚を発揮した。過去5年、銅価格が株価(S&P500)の先行指標としてワークしたケースは①2015-16年のチャイナショック、②2018年10-12月のFED金融引き締め局面で生じた株価下落が代表的。①は、2015年5月に銅価格が下落を開始すると、3-4ヶ月のラグを伴って株価が追随。②は、2018年8月に銅価格が下落すると、年末にかけて株価が急落した経緯がある。
- ・1月下旬、新型肺炎の感染が拡大しアジア圏経済に対する懸念が強まった頃、銅価格は真っ先に急落していたが、それをよそに欧米株は上昇していた。そして銅価格急落から遅れること約4週間、世界的に株価は急落。今回も銅が正しかったことになる。なお、筆者は2月4日付当レポートで、そのシグナルを軽視してしまい反省している。



- ・他方、27日の下落によって米国株の過熱感は解消に向かいつつある。現在の製造業サーベイ（ISM製造業と製造業PMIの平均値を用い2007年以降のデータで回帰）から導出されるS&P500の適正水準は2850pt程度であるから、その乖離はおよそ5%程度に収まりつつある。かなり機械的な計算ではあるが、現在のマクロファンダメンタルズを前提にすれば、ボトムが近づきつつあると言える。



【株式市場・アジアオセアニア経済指標】

- ・日本株は米株安に追随して安く寄り付いた後もみ合い（9:30）。日経平均は21200円近傍で推移。

【海外株式市場・外国為替相場・債券市場他】

- ・前日の米国株は大幅続落。新型コロナウイルスに対する懸念が台頭。WTI原油は47.09^F（▲1.64^F）。
- ・前日のG10通貨はJPYとEURが買われる反面、USDはやや売り優勢。リスクオフの流れが強まると調達通貨の買戻しが優勢。USD/JPYは110を割れ、EUR/USDは1.09後半へと上昇。
- ・前日の米10年金利は1.262%（▲7.5bp）で引け。米国株下落を横目に連日の金利低下。30年金利は1.762%（▲6.2bp）。欧州債市場（10年）はドイツ（▲0.545%、▲3.9bp）、フランスが金利低下。イタリア、スペインが金利上昇。

本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所調査研究本部経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命保険ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。

